

六つの「点」に刻むもの



▲
土岐さんはパソコンソフトを使って点訳にいそむ（多治見市内で）

岐 卓多治見市内の社会福祉施設。その一室で、土岐たつ子（63歳・久美浦分教会教人）は市のボランティア団体「多治見点訳友の会」の会員が点訳した資料や書籍の確認・校正作業にいそんでいた。

29年前、小学生の息子が借りてきた本を偶然目にしたことをきっかけに点字本が不足していることを知った。

「私も点字を勉強して、目の不自由な方の力になれば……」。早速、市主催の点訳講座を受講した。

計11回の講座を修了してすぐに、受講した仲間と「友の会」を立ち上げた。いまでは、30代から90代までの25人が在籍し、書物の点訳や点字カレンダーの製作をはじめ、中高生や社会人向けの講習会の開催など、幅広く活動している。

「点訳は地道な作業だけれど、仲間と楽しくさせてもらっている。初心者の方に点字文庫の通信教育を紹介したり、折々にお道の教を伝えたり……。にをいがけの機会にもなっていることがありがたい」

会を立ち上げて2年が経ったころ、市内に住む60代の女性が入会した。数年前に病気で視力を失い、切り盛りしてきた飲食店を閉めざるを得なくなったと言うその女性は、歩くこともおぼつかなかった。

女性を車で送迎し、共に点字の勉強を続ける中で、明るい言葉をかけ、会になじんでもらえるよう心がけた。1年も経たないうちに点字を読めるようになった女性は、少しずつ笑顔が増えていった。

ところが10年ほど前、女性はがんを患い、帰らぬ人に。亡くなる直前、病床に呼ばれた土岐は、こんな言葉をかけられた。

「視力を失って生活が一変し、苦勞ばかりだった。そんな中でも、障害を受け入れて前向きに新たな人生を歩むことができたのは、すべて土岐さんと点字に巡り合えたおかげだよ。本当にありがとう」

現在、会の顧問を務める土岐は、県内外の大学や専門学校で点訳指導に当たる。また「点字研究室」室員として、通信教育基礎コースの添削を担当するほか、親里で年2回開かれる「点訳ひのきしん者養成講習会」に参加する際は、必ず会の仲間たちを連れて本部神殿に参拝している。

※天理時報 2012年12月9日号より。記事の内容等は掲載当時のものです。